三高漁業協同組合青年部活動報告
－自ら考え行動する漁業者をめざして－

三高漁業協同組合青年部
江　藤　秀　隆

1　地域の概況

私達の住む沖美町は、広島県の南西部に位置し、広島湾に浮かぶ能美島にある。西に海を経て日本三景の一つ安芸の宮島に通じており、三高は広島市と相対している。

町の人口は、４，７５１人であり、漁業、農業の一次産業の割合は３０％と高いが、広島市の経済圏にあるため、その割合は減少傾向にある。

2　漁業の概要

三高漁協では組合員１３４名で、漁船漁業は、小型底引き網、刺し網、たこ壷、一本釣りで養殖漁業は、カキ養殖、魚類養殖が行われている。

平成５年の生産量は、４，１５７ｔ、生産金額は、８億６千万円である。

3　青年部の組織と運営

三高漁協青年部は、部員相互の親睦、研修並びに緊密に連係して地域の発展と対外的な信用度を高めることを目的とし、平成３年に３５才以下の漁業後継者及び漁業従事者を対象に構成され、部長のほか、副部長２名、監事１名、専門部会代表を置き現在部員数は１９名で漁撈が５名、カキ養殖７名、魚類養殖６名で平均年齢２８才である。

活動費は部員から会費を徴収し、漁協及び町から助成を受けるとともに各イベントの収益金で運営している。

主な活動は、クロダイとヒラメの中間育成やナマコ資源の保護増殖を実施し、町の活性化のため各種イベントに参加するとともに、独自でマラソントーク等のイベントを実施している。

4　実践活動課題選定の動機

・今まで、漁業後継者の中には業種が違うためか漁撈業者とカキ養殖業者、魚類養殖業者との間にこれといった交流はなかった。

そうしたなかで、親の跡を継ぎ漁業者になったものの、地域の抱える過疎化、高齢化のなか、仕事をしていても何か生活に活力が湧かないといった気運が広がりつつあった。このことから、青年部を結成し同世代の漁業者及び漁業従事者との親睦を図り、自分自身に活力を与え、漁業に誇りをもち生活ができるよう、漁業者が直面している問題に取り組み、直ちに実行へ移せるものをまず自分らで、やってみることとし、なおかつ町の活性化につながるような活動を行うこととした。

・まず第一に漁業者以外の人達の考え方を知り、漁業者の考え方も理解してらえるようなイベントに取り組むこととなった。

次に漁撈漁業者にとって重要な魚種となっているヒラメやナマコの資源回復につながるものを実施することとした。なかでも、ナマコについてはナマコの資源管理調査のな

かでかごによる人工採苗を試みていたが、水揚げ時の採取の方が効率が良いのではとの話があり、採取を開始した。

5　実践活動状況及び効果

○1月　－　カキを食べよう　－

カキの消費拡大を目的とし、平成4年の貝毒の発生以来、毎年1月に町内の小学校の学校給食用に生カキ約50kgを無償提供している。青年部員が、カキを持ち寄り、全員でカキを洗い、生徒数に合わせ数をかぞえ、翌朝給食センターに搬入。そうして生徒にカキを食べてもらい、カキの消費拡大に一役かっている。

○3月　－　かきカキマラソン大会　－

沖美町特産の花の花卉と海の牡蛎を合わせこの名前がついている。

町主催のこの大会に我々青年部もボランティアで参加し、参加者のお世話をすることで町外の人々との交流を楽しんでいる。

○4月　－　花いっぱい運動　－

町のコミュニティー推進協議会からの申し出で、この運動に参加。山の開発による緑の喪失は、我々海の恵みを受け生活している者にとって、重大な問題と考えている。こうした思いから、まず手始めに花を植え、町を花いっぱいにしようという、この運動に参加している。

○5月　－　マラソントーク：12時間しゃべらん会　－

町民の中から講演者を募集し、ふるさとづくりをテーマに講演。その後、参加者全員で徹夜での意見交換を行った。参加者は64名で、町長をはじめ商工会青年部，農協職員、会社員、地元の若い主婦といったさまざまな職業の人達との交流ができ、漁業者だけの考え方にとらわれず、広く一般の人達の見方、考え方を知る絶好の機会となった。

○7月　－　少年少女水産教室：ヒラメの中間育成　－

平成6年度に財団法人広島県漁業振興基金及び沖美町の助成を受け設置した、陸上中間育成施設で、ヒラメの幼魚（3～4㎝サイズ）2万尾を12月から7月まで約8ケ月間飼育。途中一部放流を行い計7，200尾を放流した。給餌は自動給餌機を使用し、種苗の搬入、池の掃除、放流については、部員全員で行った。はじめてのことで、苦労の連続だったが、協力しあうことで長期間続けることが出来た。

このヒラメを使い、町内の子供達に少しでも栽培漁業に興味を持ってもらうため、美能漁協青年部、沖美町教育委員会等の協力を得て、沖美町の小学5年生を対象に少年少女水産教室を開催した。水産試験場から講師として来てもらい、栽培漁業についての話をしてもらった後、約20㎝に育ったひらめ3千尾を町内の浜に放流し、子供達の中には、初めて生きている魚に素手でさわった子もいたりして、大変好評だった。

○8月　－　ビーチタイム　サマーフェスタ　－

青年部の20代のメンバーが中心となり、ジェットスキーやダイビングを楽しむため、ビーチタイムというクラブを結成している。このクラブが中心となり毎年1回沖美町内の海浜を使い町外から主に若い女性を募集し、パーティー形式のイベントを開催。

とかく漁業者は仕事に追われ余暇を楽しむことが苦手で、若い女性と知り合う機会も少なく、こうしたイベントで将来お嫁さんにきてくれる人ができればとの思いで始めたが、現在2カップルが進行形である。

○11月　－　おきみフェスティバル　－

沖美町の産業祭であるおきみフェスティバルに、我々青年部は、地元で水揚げされる魚を使った釣り堀りで参加している。又毎年１０月に実施している視察研修の研修報告を兼ねる意味で視察した地域の海産物を町民に安く販売することとしている。

○12月　－　稚ナマコの採取　－

我々三高の漁業はカキとナマコが主流で、組合員のほとんどがこの二つの産物で生計をたてているといっても過言ではない。

特にナマコについては、漁撈業者にとって、冬場のナマコ漁しだいで１年間の水揚げが大きく左右されるほどの需要な魚種である。

又、漁撈業者もナマコを三高ナマコとして、商品化を長い年月をかけて進め、今日では市場でも、“三高ナマコ”とブランドとしての地位を確立している。

一昨年、カキ業者の青年部員から、カキの水揚げ時に稚ナマコがカキについているとの話があり、青年部で、その稚ナマコを採取し、ナマコ漁の終わる３月末まで蓄養し、放流することとした。平成６年１１月から始め、青年部のカキ業者４軒が毎日カキの陸揚げ作業時に船からコンベアーへ移す間に、ナマコを採取している。採取できる時間は１日約２時間で、作業に追われながらの採取でもあり、採取できる数は少ないが、多い時は１人が１００匹採取することもあった。それと、毎月１回、農林事務所と水産試験場の協力を得て、集中的に５～６人で採取し、月毎の変化を見ることとした。

昨シーズンは約５千匹の稚ナマコを採取し、放流したが、採取した稚ナマコを直接放流するのでは、少し小さすぎるのと、傷を受けているものもあるため、平成６年度に設置した陸上中間育成施設を使用し、稚ナマコの傷を再生させ、少しでも大きく育て放流しようと、中間育成を試みた。

餌には海藻（アオサ）を与え、１１月から３月頃まで育成したが、水温は冬場で、平均１６℃と、地下水のため通常海水温度より少し高いようであった。

稚ナマコ平均１kg２００匹づつを６組に分養し、育成したが餌が適当でないのか目立った成長は見られなかった。

ただナマコの重量は海水を含んでいるため、短期間で比較するのは困難と考えられたので、途中で測定をあきらめ一部を越夏試験のため残し、平成６年３月末に三高沖のナマコ増殖場に放流した。

越夏試験は６月下旬まで続けていたが、ヒラメの中間育成が入り、育成池が不足したため、やむなく中止せざるを得なかった。

ナマコの採取については、現在も続けているが、私達が調べたところ、カキ筏１台当りに付着しているナマコの数は、４，５００から１４，０００匹で、１１月に採取したナマコ１匹当りの体重、４．８ｇから６ｇがシーズン終了の６月には体重２６ｇになっており、月をおうごとに採取した稚ナマコの１匹当りの平均体重は、４ｇ、８ｇ、１０ｇ、２６ｇと大きくなっていた。

6　波及効果

・イベント等各種活動を行っていくにつれ、青年部員の発言も次第に増え、進んで提案し、実行していく積極的な部員に変身してきた。このことが、地区内の他漁協青年部へも好影響を与えている。

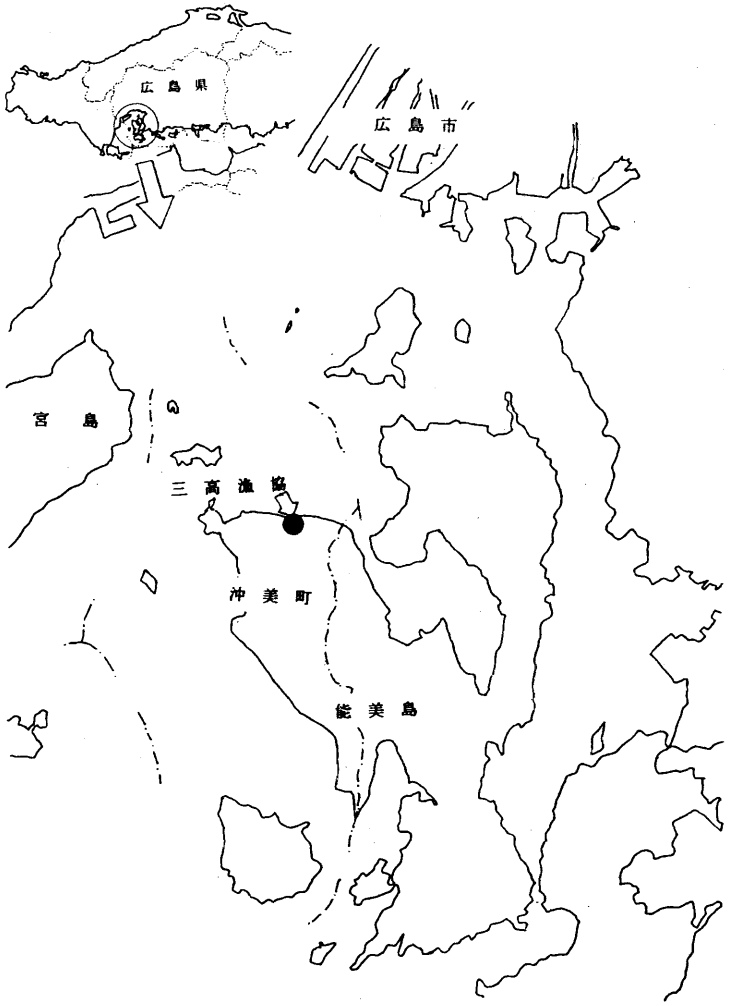
・花いっぱい運動は、今後、山の植樹活動への取組みに進展している。
・ヒラメの中間育成は、県内で、はじめて陸上水槽をもちいて実施し、この中間育成の有効性を実証する等パイロット的な役割を担い、現在他地区への広がりを見せている。
・稚ナマコの採取放流については、過去から漁場の競合による様々なトラブルが発生し現在では感情的なもつれにまで発展しているカキ業者と小型底曳業者との話し合いの場ができるきっかけになるものと考えられ、同じ広島湾で生活している者同士という仲間意識の醸成に役立つはずである。更に、この採取放流が広島湾内の他業者へ広がって行けば、当湾内のナマコの資源回復の一助となると考えられる。

7　今後の課題

・我々の活動は、母体である三高漁協、沖美町、県、その他大勢の人達の協力を得て、活動してきた。それは、我々が自ら考え行動してきたからこそ、協力し、手助けをしてくれたのだと思っている。

これからの広島県の水産情勢は、とても厳しいものがある。

広島県の魚であるカキでいえば、貝毒の問題、そして昨年発生した赤潮の問題、長く低迷している魚の価格、後継者問題、いろんなことが我々漁業者にのしかかっている。こうした問題は、我々が漁業で暮して行くうえで、ひとつひとつ解決していかなくては、ならない。何かあれば、行政が助けてくれるという考えは捨て、若い我々が、自ら考え行動し、その後押しを行政がしてくれるようにしなければならないと考えている。

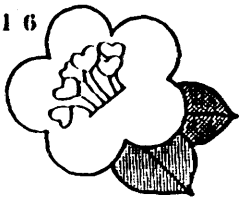


位　置　図

1月　ー　カキを食べよう　ー

1がつこんだて

1995（平成7）年

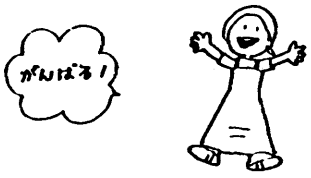
月	火	水	木	金
	10 ミートス ツナサラ クレープ			し うに かばやき
16  ふりかえきゅうじつ	17 シーフード りんごと ピロシキ			カレー ん丸) スローサラダ ーグルト
23 そぼろごはん さつま汁 ちくわの3色あげ ももヨーグルト	24 やきうどん 海のさちサラダ クロワッサン （中学ーチーズチョッパ）	25 ごはん おでん カキフライ	26 バターリッチパン ミートボールシチュー スパゲッティサラダ	27 ごはん ふりかけ うまに 大豆のあげに
30 セルフおむすび （ひまきのり・ゆかりごはん） えびだんごのスープ ささみのレモン煮 （中学ーりんご）	31 シーフードスパゲティ フランクソテー フルーツの オレンジソース			

きゅうしょくしゅうかん

《今月の給食から》

25日　郷土料理献立「カキフライ」

今月の郷土料理は沖美町の特産品の「カキ」を使った、「カキフライ」です。カキは、三高漁協青年部から沖美町の海で育った、新鮮なカキをいただきます。



（小・中学校用）

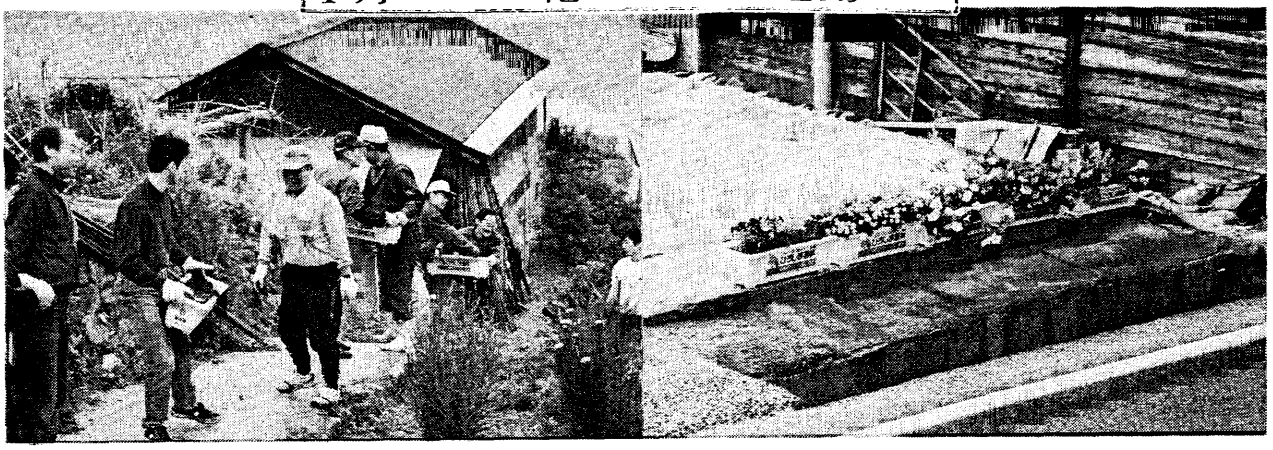
☞　牛乳は毎日あります。

☞　物資の都合により、献立を変更する場合があります。ご了承ください。

沖美町立学校給食共同調理場

3月 ― かきカキマラソン ―

4月 ― 花いっぱい運動 ―



5月 ― 沖美マラソントーク ―

沖美マラソントーク

☆ 飲んで食べて、仕事のこと趣味のこと、自分・友人のこと、その他今、自分が思っていること、してみたいと思っていること、夢、なんでもいいから夜通し語り、考えてみませんか！

とき　5月21日（土）PM7：00～22日（日）AM7：00

ところ　沖美町ふれあいセンター

参加者募集

参加申込　参加者は、どなたでもOK！
参加は、当日でもOK！

趣旨

私達、三高漁協青年部は、20代～30代の漁業にたずさわっている青年のグループです。

漁業のことだけではなく、ふるさと沖美町を愛し、たくさんの沖美町の人達とふれあい（異業種間交流）を語り考え、ただ沖美町に住んで漁業に従事しているだけでなく、ふるさと沖美町との関わりを持って活動していきたいと思い、この度、沖美マラソントーク（12時間しゃべらん会！）を企画いたしました。

多数、ご参加ください。

青年部長　下前　清弘

講演者募集

講演者　テーマは、ふるさと造りとし、若者に活力を与えてくれる話の出来る人を望んでいます。

講演時間は、30分程度とし、応募人数により当方で整理させていただきます。

講演申込　5月19日までとし、三高漁協青年部・事務局（水口）まで申込ください。

☎ 47－1111

どなたでも、歓迎します。

（12時間しゃべらん会！）

7月　―　少年少女水産教室
：ヒラメの中間育成　―

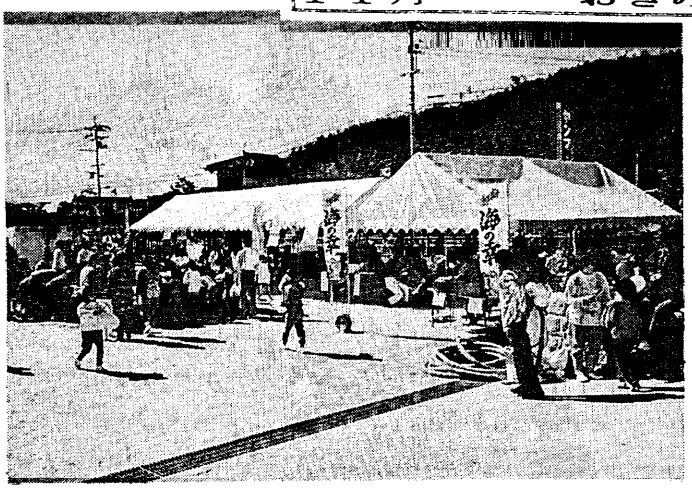
陸上中間育成施設

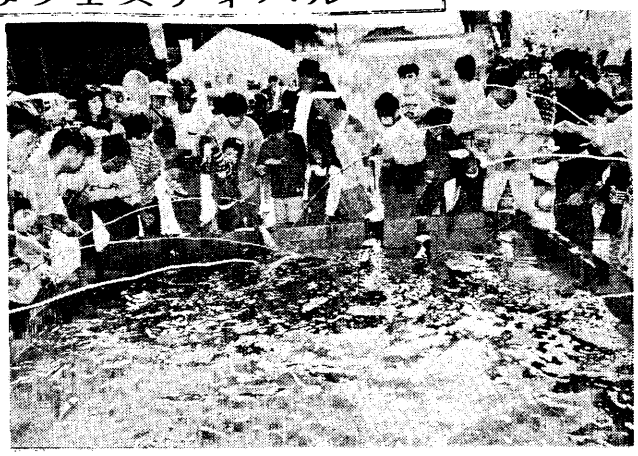
育成中のヒラメ

放流

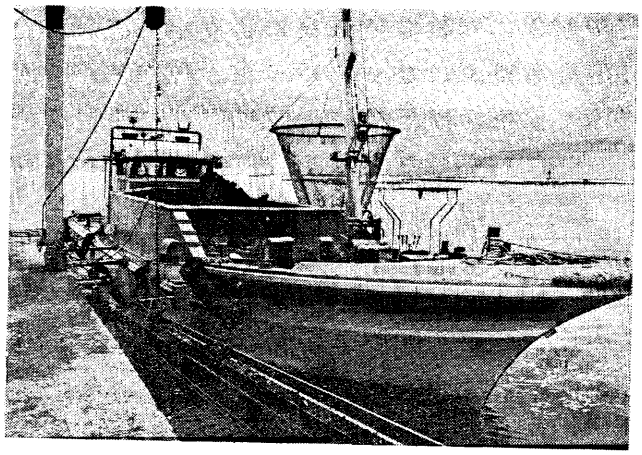
8月　―　ビーチタイム
サマーフェスタ　―

１１月　―　おきみフェスティバル　―



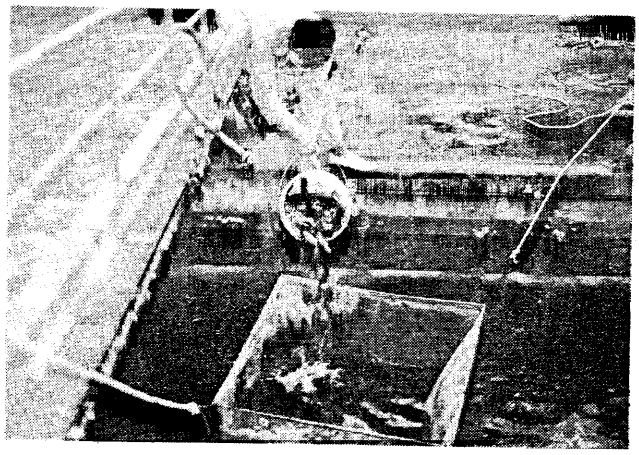


１２月　―　稚ナマコの採取　―



カキ陸揚げ作業

稚ナマコ採取



稚ナマコ蓄養

稚ナマコ分養